

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 28 日現在

機関番号：32504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381040

研究課題名(和文) 近世日本幕藩教育体制の創出過程における漢学教育の役割 孔子廟・積奠の制度化を軸に

研究課題名(英文) Chinese Learning in the Creation of the Bakuhan Education System: The Institutionalization of the Confucius Temple and the Sekiten Sacrificial Ceremony

研究代表者

朱 全安 (SHU, Zenan)

千葉商科大学・政策情報学部・教授

研究者番号：20266183

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)： 近世日本の幕藩教育体制は、江戸中期以降、湯島聖堂・藩校の創設をもって確立したとされるが、それを遥かに遡る江戸前期より幕府・諸藩では、将軍・藩主が各々の政治的関心に基づき、漢学教育を行ってきており、それらの営為こそが幕藩教育体制を生み出す基盤となった。本研究では、江戸前期に為政者が主導した個々の漢学教育の営みを、孔子廟・積奠の制度化を軸として解明し、それらが幕藩教育制度の創出過程において果たした役割を明らかにした。

研究成果の概要(英文)： The Bakuhan education system of early modern Japan was well established by the mid-Edo period, bringing with it the founding of the Yushima Seido and the various domain schools. If we trace back further, we find that from the early Edo period Chinese learning was promulgated by the Bakufu and various domains, inspired by the political concerns of individual shoguns and daimyo, and it was these institutions that provided the foundation for the Bakuhan educational system. This research project investigates the Chinese learning institutions created by rulers in the early Edo period, focusing on the institutionalization of the Confucius temple and the Sekiten sacrificial ceremony, explaining the role they played in the process of establishing the Bakuhan educational system.

研究分野：日本教育史、東アジア文化史

キーワード：教育史 文化史

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまで一貫して教育学の視点から、近世・近代日本教育における中国の言語・文化の摂取を、実証的に研究してきた。本研究は、それらの研究成果・研究視角・研究方法を踏まえつつ、研究をより一層深化・発展させたものである。

はじめに、明治初期、近代教育草創期の日本の官立学校での中国語教育の成立過程を考察した。その結果、近代教育の中で中国語教育が成立するに至るには、それ以前の歴史上の政治的・社会的・文化的要請が強く関係しており、近世日本における中国語教育の実態を知る必要があると痛感し、研究の範囲を近世日本教育史の研究にまで広げた。

その後、近世日本における中国語教育の研究を進め、政治的・社会的・経済的な状況から総合的に中国語教育を考察した。

さらに、近世日本の漢学教育について研究し、その結果、近世前期に日本の漢学教育機関で行われていた漢学教育は本質的に外国文化摂取であり、摂取の態様・程度の差異は、中国語をいかに取り扱うかに端的に現れるということが明らかになった。

そこで、漢学教育機関における中国語の位置づけを手掛かりとして、各機関の漢学教育の姿勢を探究した。その結果、中国の学問・言語に関する教学、例えば儒学経書の学習、孔子廟で積奠が行われる際の中国語音の使用などが幕府・諸藩の政治的な必要により行われてきたことが明らかになった。

本研究では、以上の研究を踏まえ、研究課題として「近世日本幕藩教育体制の創出過程における漢学教育の役割 孔子廟・積奠の制度化を軸に」を設定し、江戸前期の幕府・諸藩の漢学教育の営みが、いかにして江戸中期以降の幕藩教育体制の創出へと繋がっていたかを探究した。

2. 研究の目的

近世日本の幕藩教育体制は、江戸中期以降、湯島聖堂・藩校の創設をもって確立したとされるが、それを遥かに遡る江戸前期より幕府・諸藩では、将軍・藩主が各々の政治的関心に基づき、漢学教育を行ってきており、それらの営為こそが幕藩教育体制を生み出す基盤となった。

本研究の目的は、江戸前期に為政者が主導した個々の漢学教育の営みを、孔子廟・積奠の制度化を軸として解明し、それらが幕藩教育制度の創出過程において果たした役割を明らかにすることである。

本研究は、江戸前期の幕藩教育発生期に着目し、為政者主導の漢学教育における孔子廟・積奠の制度化に焦点を当て、文化史研究の視角から、当時の日本の政治的・社会的・文化的な環境の中で、また、明清交替により

変化した東アジア地域秩序の中で、為政者がいかなる目的・方法をもって孔子廟・積奠を自らの漢学教育機関に採り入れたのかを考究し、幕藩教育体制の創出過程における漢学教育の役割を解明するものである。

3. 研究の方法

本研究は実証的方法を特徴とする。具体的には、国内外に残存する幕藩漢学教育機関の一次史料を調査し、個々の基礎的な史実を掘り起こし、併せて、広く日中両国の漢学教育に関する文献を収集・分析し、各々の漢学教育機関・漢学者等が置かれた政治的・社会的状況の中で捉え、江戸前期幕藩漢学教育において孔子廟・積奠が行われた実態を解明する方法である。

研究を進めるにあたり、以下のことに重点を置いた。

(1) 実際に行われた漢学教育の中で、中国文化に由来する孔子廟・積奠の何が、いかに、どの程度、選択・摂取されて、定着していったかを、日中両国の関係史料に基づいて分析し、その起因・経緯・影響を考察することにより、江戸前期の幕藩漢学教育が後の教育体制の確立において、いかなる役割を果たしたかを明らかにすること。

(2) 日本教育史のカテゴリーを超えて文化史の視角から、広く当時の幕藩漢学教育に係る文献史料を発掘収集し、聖堂の建築、積奠の儀式等を記録した絵画、図像史料や詩文等にも注目し収集して、中国にある同時代の関係史料との比較研究を行い、その異同を明らかにすること。

(3) 東アジア地域の歴史空間に起きた明清交替が、日本の漢学教育、とりわけ幕藩漢学教育にいかなる影響を与えたかを、幕府・諸藩の権力中枢に近い知識人たちの言動・思考・認識の変遷によって検討し、東アジア地域同時代史の中で多元的に、幕藩漢学教育の実態・理念・目標を正確に把握し、併せて、それが後の幕府・諸藩の学校創設といかなる関わりをもったかについて、通時的な理解を得ること。

4. 研究成果

本研究により、以下の史実を実証的に跡付けることができた。

(1) 日本では、古代律令制の下、大学寮・国学において孔子を祀る儀礼である積奠が行われていたが、大学寮焼失以来、近世に儒教が勃興するまで、積奠は絶えて行われなかった。近世に至って再興された積奠は、それを

執り行う教育機関（藩校、私塾）対象（武士、民間人）主宰者（藩主、儒者、民間学者）によって、それぞれ目的（幕府への忠誠、儒教への理解、古代釈奠の再興、仏教の護持）を異にしていた。

(2) 佐賀藩では、第二代藩主鍋島光茂・第三代藩主鍋島綱茂が儒学に関心を示していた。その環境の下、第二代藩主光茂が佐賀城二の丸に鬼丸聖堂（孔子廟）を建立し、儒学者武富廉斎が大財聖堂（孔子廟）建立した。

(3) 多久邑では、第四代邑主多久茂文の主導の下、元禄年間に儒学を教える学校が創設され、宝永五年に多久聖廟（孔子廟）が建立され、釈菜（釈奠）が行われた。

(4) 小城藩では、第二代藩主鍋島直能の主導により、漢学教育に力を入れ、藩士に儒学の知識と中国の言語を学ばせ、漢学教育を行っていた。下級藩士の子である下川三省は、藩主鍋島直能の命令と援護の下、中国知識人朱舜水について生きた漢語と儒学を学び、やがて藩儒に登用され、小城藩漢学教育の基礎を築いた。

(5) 多久聖廟の建立は、これに先立つ幕府および地域（佐賀藩、小城藩）における儒教勃興の流れの中に位置づけられるとともに、儒教的な徳によって領民を文明化し、領地を治めようという多久邑主多久茂文の政治構想の一部をなす、具体的な視覚表現である。

(6) 江戸前期において、為政者が主導した個々の漢学教育の営みを通して、孔子廟造営・釈奠実施の制度化が進められ、それらが幕藩教育体制の創出過程において重要な役割を果たした。

さらに進んで江戸中期になると、第五代將軍徳川綱吉による儒教経典の研究、文治政治の促進、孔子廟造営への関心を基礎として、林家塾第三代当主林鳳岡との協力により、湯島聖堂が創設され、それを契機として、幕府と諸藩との交流を通して、諸藩による藩校の設立が急増し、武家社会に漢学教育が普及し、文治の気運が高まった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

Zenan SHU, How the Edo Bakufu Established the Yushima Confucius Temple, 千葉商大紀要、査読有、54巻1号、2016、19 - 35
<http://id.nii.ac.jp/1381/00005236/>

Zenan SHU, Interpreting the Establishment of the Confucius Temple and School at Taku in Saga Domain, 千葉商大紀要、査読有、53巻1号、2015、7 - 21
<http://id.nii.ac.jp/1381/00002548/>

朱全安、藩儒下川三省の登用にみる小城藩漢学教育の端緒、千葉商大紀要、査読有、52巻1号、2014、47 - 63
<http://id.nii.ac.jp/1381/00002494/>

〔学会発表〕（計8件）

Chard Robert, Texts and Temples: The Culture of Confucianism in China and Japan, University College Cork, 2017. 1.27、コーク（アイルランド）

朱全安、従湯島聖堂の建立看徳川幕府文治気運の高揚、中国礼学文化論壇、2016. 6.25、長沙（中国）

Zenan SHU, Different Motivations for Performing the Sekiten Rite in the Early Modern Japanese Bakufu and Domains: The Taku Confucius Temple Sekiten Invocation Text, East Asian Interactions IV, 2016.3.5、オックスフォード（英国）

朱全安、日本近世建立孔子廟的原委及意義 以大財（大宝）聖堂為例、辟雍論壇、2015.9.26、北京（中国）

朱全安、近世日本再興釈奠礼浅析、“中華礼制与現代社会”學術研討会、2015.4.18、西安（中国）

Zenan SHU, The Origins of the Ootakara Confucius Temple in Saga in the Early Edo Period, East Asia Interactions III, 2015.3.7、オックスフォード（英国）

朱全安、江戸前期佐賀藩多久邑行釈菜礼探源、礼学国際學術研討会、2014.12.6、杭州（中国）

朱全安、近世前期九州儒学研究源流考 以佐賀藩を中心、紀念孔子誕辰2565周年国際學術研討会、2014.9.26、北京（中国）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

朱全安（SHU, Zenan）
千葉商科大学・政策情報学部・教授
研究者番号：20266183

(2) 研究分担者

Chard Robert (CHARD, Robert)
東京大学・東洋文化研究所・客員教授
研究者番号：30571492